

農耕儀礼と歌謡：古代歌謡と南島歌謡との  
比較試論(3)

竹内, 重雄 / TAKEUCHI, Shigeo

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

113

(終了ページ / End Page)

143

(発行年 / Year)

1993-12-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003306>

## 農耕儀礼と歌謡

——古代歌謡と南島歌謡との比較試論(3)——

はじめに

竹内 重雄

日本古代歌謡と南島歌謡との比較研究の一方法として、私は農耕儀礼の場での歌謡を取り上げまとめてきた。農耕儀礼の場での歌謡としては、具体的には本土の「田遊び」の歌謡と南島の「種子取り祭」の歌謡（竹富島）とを取り上げた。<sup>(1)</sup> 今回、竹富島に行き種子取り祭を見る機会を得たが、その調査での成果をもとに、さらに田遊びと種子取り祭とを比較することでその相互のつながりの様相を考え、さらには韓国に伝わる「牛戯び（ソノルムクッ）」との比較を試み、東アジアの地域の中で「田遊び」系農耕儀礼のつながりを見渡したいと思う。この作業を行うことによって、「田遊び」に

つながる芸能の歴史的深さを見ることができ、これまで中世の芸能史の中だけで論じられて来た「田遊び」の歴史的問題についても一石を投じることができると考えている。

### 竹富島の種子取り祭

竹富島の種子取り祭に行われる諸行事の中で、今回最も注目したのは祭りの中で演じられる芸能であった。

「田遊び」においては、根源的には芸能的所作と歌謡（唱えものも含む）とが一体化されていたと私は考えている。そしてまたその折にうたわれる歌謡は、対語対句形式を含んだ詞章であった。同じ内容の詞章を、くり返しながらうたい進めて行く形式を基本的に取り入れているものであるということとを想定している。この形式の詞章を含む口承伝承物は、現在に伝わるものでは本土の例では祝詞に見ることができる。私はそれが日本の歌謡の古い形式だったと考えている。

この条件に良く合う歌謡が、種子取り祭に行われる芸能中に見出すことができる。

竹富島の種子取り祭の芸能は、まる二日間にわたって取り行われる。神事の中の芸能であるが、神事そのものについてはここで触れる予定はなく、島の人々の手で演じられる芸能についてのみ論じていく。

この芸能は、大まかに分類するならば、神前で行われる芸能——「庭の芸能」と「舞台の芸能」

——と、村中の家々を訪問する形で行われる芸能の二つに分けることができる。

後者は、祭に集まった村人達が村の中の主だった家から村の構成員である各家々まで次々と訪れる「世乞い」と呼ばれるものである。「世乞い」では「道歌」、「巻歌」、「シキドゥーユー」、「ガリーの歌」、「イニガタニ（稲が種子）アヨー」、「ニーウリ（根下り）のユンタ」がくり返しくり返し歌われる。各家々を訪れるたびに歌われるので、訪れる家の数だけ歌うということになる。この時には、踊りは巻歌とともに巻踊りが成され、「シキドゥーユー」、「ガリーの歌」にも簡単な踊りが付く。巻踊りは両手で手拍手を取りながら、参加者が庭の中をぐるぐると回って踊るといごく単純なものである。

「世乞い」は朝の「世乞い」と夜の「世乞い」があり、いずれも祭の第七日めに行われる。朝の「世乞い」は、弥勒奉安殿及び世持御嶽での早朝からの儀式が終了したあとに行われる。神司（カシノカ神女）を先頭に島の古老・役員達は道歌を歌いながら、村の役員の家に行く。この年は喜宝院の上勢頭家であった（一九九一年）。前庭で巻歌を歌いながら巻踊りを踊りぐるぐると回る。そののち「シキドゥーユー」と「ガリーの歌」を歌い踊り、家の中に入る。家の中では「イニガタニアヨー」と「ニーウリのユンタ」が座ったままで歌われ、再び一同そろって道歌を歌いながら世持御嶽まで帰ってくる。そこでも「巻歌」、「シキドゥーユー」、「ガリーの歌」がくり返され、それが終わると庭の芸能そしてその後に舞台の芸能へと進行する。

一方舞台の芸能が終わった五時すぎになると再び「世乞い」が行われる。世持御嶽を出た二行は、この種子取り祭を創始したといわれている根原金殿の子孫の根原家を最初に訪れる。そののち、各部落に分かれて深夜、早朝に至るまで「世乞い」の一行は各家々を次々と訪れる。

「世乞い」で歌われる六種類の歌の内容について考えると、「道歌」「シキドゥーユ」「ガリーの歌」は豊かな世を招くためのものであり、「巻歌」は実際に舞っている家をほめたたえるものという性格がある。「イニガタニアヨー」と「ニーウリヌユンタ」は、二つで一連の農作業のトータルな行程を順次歌っていくものとして完結している。このアヨーとユンタは座敷で座って歌うもので、その場の人々が斉唱する形式である。

「世乞い」の行事は、一行程が何度も繰り返されるので夜おそくまで延々と続くが、その一行程についてみれば、長くはなく単純なものである。夜の夜乞いでは、この一行程が終了すると酒に酔った人々は演説を始めたり、最近流行の歌を歌ったりで座がくずれ宴会の様相を呈する。楽しい一時である。それらがすべて終了すると、神司を先頭にまた道歌を歌いながら次の家へと向かうのである。<sup>(2)</sup>

一方、神前で行われる芸能、すなわち「庭の芸能」と「舞台の芸能」は、祭の第七日め及び第八日めの午前中から夕方にかけて行われる。これらは、今ではまさに芸能大会という趣がある。

この日は、竹富島の出身者をはじめ、多くの人々が東京や沖縄や石垣島等からやって来て、この小さな島に何百名も集まって見物し、楽しい一時を過ごす。

「庭の芸能」でも「舞台の芸能」でも農耕儀礼の要素を取り入れた芸能がその中心を成す。とりわけ私の注目する農作業の過程を取り入れた芸能がしばしば登場する。芸能の中で農作業の様子が演じられるのであるが、その点が先に述べた「世乞い」とは全く異なるのである。本土の「田遊び」との比較がなされるのはこの部分である。

農作業に関わる芸能で詞章と踊りとが特に問題とされるものに、「庭の芸能」の「マミドーマ」(仲筋村)と「舞台の芸能」の「種子蒔狂言」(仲筋村)の中で唱えられる「神酒又飾ン口」とがある。「マミドーマ」は女性によって演じられるものであり、三味線の伴奏によって歌われる節歌である。その詞章はつぎの通りである。<sup>(3)</sup>

一、ちちぬに種子取

種子<sup>たね</sup>るしぬう願<sup>ねが</sup>い

ウヤキ ユウノウレ

ウヤキ ユウノウレ

ウーリ ウーリ ハッハッ

二、今年世は願<sup>ねが</sup>ゆり

今夏<sup>この夏</sup>世<sup>よ</sup>ば願<sup>ねが</sup>ゆり

三、大畑<sup>おほはたけ</sup>走り行き

ツチノエネの日の種子取り

種子<sup>たね</sup>下ろしのお願<sup>ねが</sup>い

(囃し、くり返し)

今年の世(豊饒)をお願いし

来年の夏の世をお願いし

大きな畑に走って行き

長畑 走り行き

四、銀種子蒔き入り

黄金種子蒔き入り

五、犬が毛に根毛生い

猫が毛に本生い

六、うるずぬぬ成りよらば

若夏ぬ成りよらば

七、薄丈柴りようり

力草だき繁りようり

八、大穂出でしゆらば

長穂出でしゆらば

九、石ぬ実入り賜らる

金ぬ実入り賜らる

長大な畑に走って行き

銀の種子を蒔き入れ

黄金の種子を蒔き入れ

犬の毛のように根が生え

猫の毛のように本が生え

初夏になりましたら

若夏になりましたら

薄のように成長しまして

力芝草のように繁りまして

大きな穂が出てきたなら

長い穂が出てきたなら

石のような実を賜ります

金のような実を賜ります

(当日は第六番まで歌われた。)

この歌では、まず願いから入り、畑に行き種子を蒔き、その種子が根を下ろし、夏には丈高く成長し、穂を出して実っていくまでの作物の成長の過程を述べている。踊りは「農作業の仕草を舞踊化し

たもの」で、二十名程度の婦人によって踊られる集団舞踊である。種子の入った壺を持った一人の婦人を先頭に、鎌、鍬、鉾を持った女性達が時には同じ振りで踊り、時には持ちものに従って種子を蒔き、鎌を刈り、鍬を打ち、鉾でならす振りで踊る。詞章の作業過程に従って(時間の流れに従って)振りが付けられているのではなく各パートごとに同時に踊る。踊りは型をもった踊りとして独自に完成されている。芸能化が進んだ結果の産物と言うことができそうで、また節歌ゆえの振り付けと言えよう。

それに対しては、「舞台の芸能」での狂言がある。狂言には例狂言、組狂言、一人狂言、笑し狂言、遊び狂言の五種類があるという。なかでも例狂言は「種子取祭の中でもっとも重要な狂言とされていて、どんなことがあっても毎年演じなければならぬとされている。それは、すべて農耕儀礼的な狂言であり、信仰的要素の濃い狂言である。」というものだが、とりわけ第八日の仲筋村の「種子蒔狂言」には、農耕の作業過程をはじめから終わりまで述べた「神酒又飾ン口」という世持(登場人物の名)の口上の部分があり、注目される。それは次のようである。

〈世持〉

うーとうとう

おお尊と

今日ぬ日

今日の日

黄金日

黄金の日

ひな 月な一ら月調び  
ひなち 日な一ら日調び  
すくどく 作る時ぬ  
すくどく 作る日や

ちちぬにぬ  
たにとる 種子取ぬ日選なり  
すはて 大島

はせいん とう島出し  
ほう 種子  
まろう 種子  
な一ひん 種子  
な一ぬ 種子  
はち 初ぬ種子  
ゆるび かいや  
と 後ていうち  
ま 前ていうつ蒔く種や

月の中から月を調べ  
日にちの中から日にちを調べ  
作る時の  
作る日や

ツチノエネの日の  
種子取りの日撰りに  
大畑

平地畑に出て  
ホ一 種子  
マラー 種子  
ナーヒン 種子  
ナーヌ 種子  
初の 種子を  
ゆるび (未詳) には  
後ろへと打ち蒔き  
前へと打ち蒔く 種子は

いちか 五日越し  
としか 十日越しぬ夜雨んな  
いぬが 犬が毛  
まめが 猫が毛に  
にろう 根生い  
はとう 本生いし  
たぬ 組ぬ子  
はとう 根生い  
はとう 本生いてい  
あんど あんじおーるんど

おう  
へ世持  
はとう 根生い  
はとう 本生いんな  
み 芽んかいさく

五日越し  
十日越しの夜雨に  
犬の毛  
猫の毛のように  
根生い  
本生いし  
根生い  
本生いしてと  
おっしやっていますよ

おお  
根生い  
本生いには  
新芽も美しく

芽めかいさく  
 あらし給たまうりていり  
 ひさたぶい  
 かかいぶいな 出いじ  
 まどう測はかり  
 きどう測はかり  
 草くさたし やしなうば  
 神かみぬ前まへや  
 御ご撫なでいし やしな  
 く撫なでいし やしな 給たまうらば  
 ぶばまん神かみ  
 ぶなるん神かみぬ  
 ようるだきまつすんかいどう  
 うるずん  
 若わか夏なつぬ来きば  
 薄うすでー  
 若わか芽めも美うしく  
 あらせてくださって  
 ひさたぶい (未詳)  
 かかいぶい (未詳) に出いて  
 間ま隔かを測はかり  
 幅はたを測はかり  
 草くさを取り養やしなうたら  
 神かみ様さまは  
 御ご撫なでして養やしない  
 こ撫なでして養やしなうてくださうたら  
 叔おじ母はは神かみ様  
 姉あね妹いもうと神かみが  
 ようるだきまつす (未詳) 迎むかえてこそ  
 初はつ夏なつ  
 若わか夏なつが来きると  
 薄うすほど

力ちから草くさでーむたい栄さかいし  
 むたい栄さかいんなー  
 大おほ穂ほ  
 長なが穂ほ出いじ  
 大おほ穂ほ  
 長なが穂ほでい  
 あんじおーるんど  
 大おほ穂ほ  
 長なが穂ほんな  
 石いしぬ実み入いる  
 金かたぬ実み入いる  
 真ま粒つぶ  
 力ちから芝しば草くさほどに茂さかり栄さかえて  
 茂さかり栄さかえたうちには  
 大おほ穂ほ  
 長なが穂ほが出いて  
 大おほ穂ほ  
 長なが穂ほつて  
 おっしやっていますよ  
 おお  
 大おほ穂ほ  
 長なが穂ほには  
 石いしのような実みが入いり  
 金かたのような実みが入いり  
 真ま粒つぶ

真種子給うらりていり

取る節

刈る節んな

のうるおーすき

かいおーすき給うらりていり

月むどうい

日むどういし出し

女がしや 頭にすい持ち

男がしや 肩に上い持ち

ぶばまん神

ぶなるん神ぬ手ばな受き

おうら取り

真頭取りどう

神ぬ御花米

うしやぎ

うしやぎ残いどう

真種子を賜わりまして

取る季節

刈る季節には

良い天気

美しい天気を賜わりまして

月戻り

日戻りして出て

女達は頭頂に戴き持ち

男達は肩に上げ持ち

叔母神様

姉妹神が手花を受け

上の肩から取り

真頂から取ってこそ

神の花米は

差し上げる

神へ差し上げての残りでこそ

年貢上納や

すかんばなでー

みはなでーし うしやぎ

うしやぎ残いどう

大家

新家に積んきどう積んすき

はるみかじ残いどう

御酒

神酒まらしていり

御酒しや

神びらい

主びらいし

神酒しや

とうむびらい

人びらいし

遠さんな聴くら

年貢上納は

摺み花米と

御花米として差し上げる

年貢を差し上げての残りでこそ

大家

新家に積みに積み置き

積み置き毎の残りでこそ

御酒

神酒をお造りになって

御酒では

神とのおつきあい

主とのおつきあいをし

神酒では

友との交わり

人との交わりをし

遠くの人はその果報を聴くだろう



「神酒又飾ン口」についてはこのように祭りの場が明確に分かっている。つまり種子取り祭という播種期に行われる祭り、植えた種子の豊穡を予祝する願いがそこにはある。この種子取り祭において、農作業の全行程を表すのは、狂言の中ではここ一箇所だけである。そのほかの狂言や他の「舞台の芸能」では、農作業の場面が出てきても播種のことに限られている。この祭りの場のテーマは播種であると言えるであろう。「庭の芸能」でも「マミドーマ」を除けばテーマは播種である。この播種については、踊りと詞章とが一致していると言える。種子播きの動作にはその詞章が付随している。しかし、全行程を唱え、歌う歌謡については、「世乞い」にも「芸能」にも存在はするのだが、その内容を再現する踊りは存在しない。唯一「マミドーマ」だけが例外であるが、これも先に述べたように踊りの振りには詞章の内容に忠実ではない。

以上の点をまとめると、「世乞い」では歌が中心で、ここでは農作業の過程を全て表すアヨーとユンタが歌われる。「庭の芸能」「舞台の芸能」ではその中心テーマは播種である。その中に農作業の全行程を歌いこんだ詞章が散見するが、そこに必ずしも踊りが付随しているわけではない、という構成になっている。

### 「神酒の飾ン口」に比される「田遊び」の祭文

本土の「田遊び」においても、農作業の全行程を芸能として表現したものは多くない。田植後の収

穫過程の表現については、全国の三〇〇余の田遊びのうち、一割にも満たないという<sup>9)</sup>。そして「田遊び」のおもしろさは、日本全国に分布しているながら、これが「田遊び」の基本型だ、定型だ、という。本来の姿<sup>10)</sup>が見えない点にある。地方地方によって特色があり、ある村に伝わる「田遊び」はその村独自のものであるとも言える。その歴史の中で様々な芸能の影響を受けつつも、その時々に合わせて姿・形を変えながら今に至るまで口承で伝承されてきたというのが、数は少ないが「田遊び」のいくつかを見てきた私の感想である。

竹富島の種子取り祭の「神酒又飾ン口」と同様に、演技は付随していないで、詞章だけで唱えられたと思われるものに藤守の田遊びの例がある。この田遊びは、現在では田作業の戯態は全く演ぜられない。長い歴史の中で育てられて来た芸能が豊かさを増し、本来の田作業の戯態からなる芸能を駆逐してしまったかのように思われる。しかし今では舞台にも乗らなくなってしまったが、かつて「水口申」で唱えられた祭文の詞章が伝わっている。これは江戸時代の写本に載せられていたというもので、稲作の過程を種子選びから収穫まで表現している。実際にはもう見ることでできない番組なので確証はないのだが、近代ではすでに唱えられるだけで、戯態も成されていなかったように想像される。その詞章は次の通りである。

「皆（水）口申」<sup>10)</sup>

あら田のし（楽し）

きたりし年の年号ハ

(その年の干支ヲ云)

正月十日あまり七日と申に

大日本東遠江の国十三国

榛原郡初倉の庄、藤守のがう(郷)に

光りをやわらけまします

大井八幡

御でてんわう(牛頭天王)

二所の権現の

御みとをそろへ

きりくきつと

押ひらき

御内なる御たねを申おろし

小かね(黄金)の御ます(枳)を申おろし

かいはか(計)つてハついゆすふり

ついはかつてハかひゆすふり

千石万石はかりあて申

三所ゆひ(結)にゆひやさだめ

いぬい(戌亥)のすみ(隅)成ほうそうか池をハ

種池となすけ(名づけ)取ひて申

つばめ口になり候へハ

おまんたら(雄斑)にくら(鞍)しき

めまんたら(雌斑)馬のこと||引用者注)にくらしき

八月十五夜の月の輪のかま(鎌)を申おろし

こし(腰)のほとについさして

おくやま(奥山)へわけ入

みやま(深山)のおくへわけ入

取ける草ハなにく

小かね(黄金)丁にふく(福)草

しろかね(銀)てうにハとこ(接骨木)の

ひやうほうハ藤のは

かimotoに、徳草、福草

せんたん(千駄) 万たん(万駄) (馬に荷を積んだ様子)  
取やあつめ

なわしろ(苗代) 所にして

いたかにつ(積) みや定め

大あし(足) のかうほとをかうあし(小足) てならし

かうあしのかうほとを大あしてならし

草しきの上手かねか

ふたきにたきいたし

おとめは(雄鳥羽) にもしつとりと

めとりは(雌鳥羽) にもしつとりと

し(敷) ひてとおる所を

ぢやうばんかかみ(鏡) のごとくおしすまし

とく(徳) の水をしそき

ふく(福) の水をたて入

一時すまいて

皆口申(水口申) にしたひこそ候へ

(当地(寺か?)のごわう(牛王)を申おろし

みな口の程につひさし申

神権現の御皆口を申おろし

八こんがうやしんぼさつの 御じん田のおん皆口を申おろし

所にまします大井八幡 御でてんわう 二所のごんげんの御みな口を申おろし

七きのしきしやう

八きのよふとめ作る田の皆口を申おろし

むろふとの作らせ給ふ作る田のみな口を申おろし

地頭殿作らせ給ふ作る田の皆口を申おろし

殿原の作らせ給ふ作る田の皆口を申おろし

まひらせ給ふまひりうとの作らせ給ふ作る田の皆口を申おろし

いならとう、よならとう、わろふへの作らせ給ふ作る田の皆口を申おろし

小かね(黄金) のびくを、わき(脇) にきつとかまへ

右りまき(蒔) にもさつふりと

左りまきにもさつふりと

まきやさため

ミつるは(三つ葉)や  
よつる(四つ葉)にさし植

池のまごも(真菰)のごとくに

そよそよそつとい(出)てきさせ給へ、

一反でせんまんそく(千万束)

二反では二千万そく

かりつみ(刈り積み)申

いいにかし(飯に炊し)げはほうらい(逢萊)の山と成る

酒につくれはいつみ(泉)となる

是よりいぬいかすみ(戌亥の隅)成るやつちやうかつほにかめ(壺)七ッ八ッ

ささなみ(小波)た(立)つを

命長え(長柄)のひしゃくをもつて

くめどものめ共つきせぬ、

長者のしんや、あらたのし

右の詞章を祭文とよんでいたようであるが、祭文や祝詞ととるよりは、むしろ唱え言であり、田遊びの歌謡ととるほうが適當であろうと思う。厳格に言えば、形式的にも内容的にも祭文や祝詞とはい

えないであろう。この「皆口申」は①種子の由来②種子選び③浸種④肥草集め⑤肥草の踏み込み⑥代ならし⑦水口まつり⑧播種⑨田植え⑩稲の苗の成長⑪刈入れ⑫収穫祝い(飯・酒造り)のようになされている。一つの詞章中にこのように農作業の過程をうたいこんでいる例は多くはない。本土の田遊びの場合は、農作業の各場面での芸能化が進んでいる。例えば東京の徳丸の北野天神社で行われる田遊びは「町歩調べ・田打」「苗代かき」「草敷・代ならし」「種蒔」「鳥追」「田まわり」「春田打」「植田かき」「肥草入れ・代ならし」「田植」「米坊・やすめ・太郎次」「田の草取り」「田まわり」「稲刈」「倉入れ」と十五の場面に分けられて演ぜられる。場面といっても舞台が変わるわけでも演者が変わるわけでもないが、曲調やテンポが変わったり動作が変わったりして、そこには明確な区分けがある。

南島の場合には、芸能の面ではそのように発展することはなかった。村芝居の要素の中で種子蒔きを中心に農耕儀礼そのものを芸能化している。その例が竹富島に今でも伝わっている狂言である。

詞章の面について言えば、右の田遊びの「祭文」の場合も竹富島の「神酒又飾ン口」の場合も内容構成、機能から考えて、共通する要素を持っているといえる。その点について新井恒易氏は次のような判断を行っている。

薩南諸島から琉球諸島に入ると、本土系の田遊びは姿を消している。奄美諸島から琉球諸島では気象条件とともに、作物などの生産と生活のリズムが異なっている。しかし、田遊びに類似のもの

がないかというところ、稲や粟などの収穫を終わって後の、次の種子下ろしに入る前の折り目（陰暦八月）の新節を中心に、稲や粟などの耕作過程を模倣的に演出する田遊びふうの「世乞い」の芸能を創造しており、それは南端の八重山群島にまでおよんでいる。世乞いは本土の年乞いに相当する。<sup>(11)</sup>

新井氏は、「田遊び」の芸能と「世乞い」の芸能を区別して考えている。もちろん芸能史的には別々に発展しているもので、そうした考察は可能であるが、私がかつて考えたように両方の芸能が根を同じにする「古田遊び」という考えを用いれば、両者の比較はもっとスムーズになるであろう。そしてその可能性を示唆する芸能が朝鮮半島にも伝えられている。

### 朝鮮半島の「田遊び」

私が朝鮮半島の「田遊び」を見たのは映像の中であつた。前田憲二監督作品の『土俗の乱声』（映像ハヌル）という長編ドキュメンタリー映画であつた。「田遊び」はその映画の中では「ソノルムクツ」という祭りの中で演じられていた。「ソノルムクツ」とは「ソ・ノリ・クツ」である。「ソ」は牛のこと、「ノリ」は戯れ、遊びの意、「クツ」はムーダン（女巫）あるいはバクス（男巫）による巫俗神事のこと。つまり「ソノルムクツ」は「牛遊び神事」とでもいうものである。

朝鮮半島での「ノリ（遊び）」は実に多様である。例えば、板跳び（シーソー様のもの）、擲銭（投

げ銭ゲーム）、紙鳶揚げ、双六、氷滑り（スケート）、独楽遊び、将棋、囲碁などから、詩会、花見、山遊び、亀遊び、綱引き、農楽、闘牛に至るまで、子供の遊びからかけ事、ゲーム、農耕儀礼というように実に幅広い。<sup>(12)</sup>この場合、日本の「遊び」とちょうど同じような使われ方と考えていいかも知れない。「田遊び」が神遊びのことをさすように「ノリ」の中にも神遊びがあるわけである。

映画に登場した「ソノルムクツ」は慶尚北道の仁川市に伝わる豊漁祭りの中で行われていた。主役は牛である。藁で編んだ席を人がかぶり、三角形の大きな牛の面を付けた「牛」が二頭（親子）登場する。親牛の方は二人の人が入り、子牛の方は一人の人が入っている。このあたりの状況を同じ祭りである楊州の「ソノルムクツ」について解説した文を借りると次のようになる。「こうした「ソノルムクツ」は何も楊州地方だけでなく、半島の中部地帯（京畿道、黄海海道、忠清北道の一部）に広く分布していた。しかしながら、現在ではこの「楊州ソノリクツ」がわずかに伝承されるのみである。

……登場するのは親牛と子牛、それに、元馬夫。次のような順序で進行する。まず巫女と馬夫との対話、馬夫の打令と徳談、馬夫と牛の動作、舞という構成である。……<sup>(13)</sup>これをそのまま仁川市の「ソノルムクツ」にあてはめても大過ないであろう。しかし問題は、楊州のものについては「田遊び」様の神遊びについて触れていないことである。

この映画のテーマは「殺牛を含む水稲耕作文化の流れ」を追うことであつた。その流れの中で「ソノルムクツ」を撮映したのである。映し出したのはまぎれもなく「田遊び」であつた。テーマがほか

のところにあるので、それを逐一撮影したわけでもないようなので、途中の何か所かが省かれているのかもしれない。「田遊び」そのものは長いものでなく、十分程度で農耕の全過程を表現し終えるようなものであった。女性を中心に何人かの男性が入り総勢十五人ほどで踊る。映像に入った農事は、種子蒔き、除草、牛ひき（代かきか）、刈り入れ、穂集め、脱穀、稲搗き、穀ふき、米運び、袋づめ運搬（肩に乗せて）、倉入れの擬態をするものであった。その間踊りを付け加えながら、リズムカルに舞うように擬態を行う動作は一つの芸能である。この祭りは重要無形文化財に指定されている「西海岸豊漁祭」の中で行われている。<sup>14)</sup>

私の浅薄な朝鮮文化についての知識によれば、農耕のトータルな過程を踊る「田遊び」が報告されているのはこの事例だけである。「ソノルムクッ」の報告例はいくつも得ることができるが、その祭の中で「田遊び」が行われるというものはこの例を除いては未だ知り得ていない。<sup>15)</sup>ただし、類似の報告は二例得ている。すなわち、

「……若者達は村の広場に出て稲植劇をやる。その劇中、前もって選ばれてゐた山神になる男が雌牛に逆に乗し、道袍儒冠の装束で山の方から降りて来る。若者は山神を迎へて歌舞する。それは田植をするときと全く同じ扮装で、紙や藁で作った稲穂を手に手に、農歌を楽器に合せて歌ひながら植付の様をなす。山神は牛の背に逆乗りしたまま悠々と廻る。植付がすむと再び楽器を鳴らして踊りかつ舞ふ。村の男女老幼は殆んどここに集まり一日を楽しむ。この日一日中、山神になった男は

神の如く絶対には尊敬され長上も老人も山神に向つて不敬の語は用ひられない。山神もまたいかなる人と言へども腰を曲げることが出来ない。（孫晉泰氏「新穀祝劇」の大意）」（難破専太郎「朝鮮風土記」一九四二年）<sup>16)</sup>

さらにまた、

「……慶南晋州地方では、元旦又は上元に切りたての青竹を四本家の中庭の四隅に立て、それにメ縄を張り廻はし、メ縄には藁と稲穂とを垂れ、竹の根元には赤土を盛り、この立竿の中央に清水を供へ豊穰を祈願する。咸南咸興地方でも一月元日にサムテイと云ふ真直な長い松の木を庭に立て幾筋かの縄を之に張り、この縄に藁で作った穀物の模型を吊し恰かも五穀の充実して穂の重々と垂れるに象どり、この神竿に対して清水を供て豊穰を祈り、十三日にはこの日を春の日としてこの竿の下で播種の行事を行ひ、十四日は夏の日として草取りの行事を、十五日は秋の日として餅で各種の穂型を作りこれを藁束の上に挿して供へ、十六日は冬の日として之等の穂を納めて家人が飲福し、竿につけた藁穂を焼くと共に焼紙を行ひ祭を終る。この正月上元に禾竿を立て稲穂を垂れて豊穰を祈る風は慶南一帯に現存し、晋州鳴石面では六月十五日之を立て餅・果物等を供へて祈り、後其祭物を田に持ち行き所々に少量づ、置く。（村山智順「釋奠・祈雨・安宅」朝鮮総督府編、一九三八年）

というものがある。いずれも「ソノルムクッ」とは関わりのない祭りの中に登場するものであるが、

「田遊び」とのつながりがうかがえそうなものであろう。仁川の「ソノルムクツ」での「田遊び」が決して特殊なものではないということがこの例からも見えるであろう。

朝鮮半島では、日本帝国主義の植民地支配が終わり、そののちの朝鮮戦争も経て、ようやく民俗学が自らの要求の中で研究されるようになった。<sup>(17)</sup>最近では韓国の民俗を全地域にわたって、民俗事象から民謡、ことわざに至るまで総合調査され出版されるようになった。そしてそれは日本語にも訳され出版されている。<sup>(18)</sup>またシャーマニズムだけに必ずしもとらわれることなく、村の祭りを解明していることとする研究も出てくる。<sup>(19)</sup>そのような流れから推測するに、あるいは韓国現地では、もう日本の「花祭り」(早川孝太郎)を始めとする祭祀のモノグラフに相当するものが発表されているのかも知れない。また「田遊び」についてもまとめられているのかも知れないが、朝鮮語を解しない私には知る由もない。

### まとめ

以上のように、「田遊び」につながると思われる芸能が、日本では本土―沖繩とつながり、さらにそれが朝鮮半島へとつながっている様子が見られる。本土―沖繩については、詞章の面でもその同質性がうかがうことができる。朝鮮半島の「田遊び」については、芸能の面のみ映像で知り得ただけなので詳しい調査はこれから将来のことになる。ただ農耕用の牛が登場することなどは本土の「田遊

び」に共通する。(南島では牛は登場しない)。

「田遊び」の芸能のつながりが見られるものの、それが朝鮮半島から渡来したものか、あるいは日本から広まったものか、もしくは南島から本土へ、そして朝鮮半島へ渡ったものか今とても判断できる状況にはない。しかしその分かれた分岐点は、稲作の伝播と関係するほど古い昔であったと考える方が理解しやすいであろうと私は考えている。

三つの地域での「田遊び」はそれぞれの国、地域の文化の中でそれぞれが独自に発展し、いずれもが豊穡儀礼の神遊びとして、村人によって意識され、そして芸能として長く伝えられてきた。本土の「田遊び」の研究はとかく中世にとどまっている傾向があるが、もっと長い時間の目で見る必要があるし、広い視野で見なければならぬであろう。

### 注

(1) 拙著「記紀歌謡以前——古代歌謡と南島歌謡との比較試論(2)——」(『日本文学誌要』第40号、法政大学国文学会)一九九一年。

(2) 東京都板橋区下赤塚の諏訪神社の「田遊び」では、その芸能のはじめに神輿をかついだ人々が獅子とともに神幸を行う。その見物の折に聞いた話であるが、地元の人々は、この行列は昔は村の各家々を一軒ずつ訪れたものだということであった。一般的に「田遊び」の中でこのような行列がどのくらいあるのかは未調査であるが、比較上興味深い点だと思っている。

(3) 竹富島民俗芸能保存会「竹富島種子取祭 国立劇場公演記念誌」一九七七年。口語訳は波照間永吉

「竹富島の種子取り祭の歌謡——祭祀と歌謡の相関についての予備的考察——」(『沖繩文化』四〇周年記念号。一九八九年)を引用・参照した。

- (4) 注3の前書七四頁。
- (5) 上勢頭亨「竹富島誌 歌謡、芸能篇」(法政大学出版局。一九七九年)三八八頁。
- (6) 狩俣恵一「竹富島の種子取祭と芸能」(法政大学沖繩文化研究所編『沖繩文化研究5』。一九七八年)三二七頁。
- (7) 注3に同じ。ただし原文の漢字のあて方は変えた部分もある。
- (8) 「南島歌謡大成Ⅳ 八重山篇」の解説。六四五頁。一九七九年。
- (9) 新井恒易「農と田遊びの研究」下、七二四頁。一九八一年。
- (10) 注9の書、上。二二二頁。
- (11) 注10の書、八頁。また、同書下、五九四頁以降に「付 南島の世乞いと芸能」と題し「田遊び」の一環として南島の農耕・稲作儀礼を紹介、言及しているが、農耕の過程を歌う歌謡は引用されておらず、総体的に資料不足の感は否めない。「世乞い」と「年乞い」の比較の方法も問題がある。
- (12) 村山智順「朝鮮の郷土娯楽」(朝鮮総督府編)。一九四一年。
- (13) 大韓民国文化広報部編「韓国の民俗文化財 芸能と工芸編」(岩崎美術社)一九八九年。
- (14) 映像中に映し出された長旗の文字からの判断である。
- (15) 注18及び19の書、「朝鮮歳時記(東国歳時記)」一九二二年、朝鮮総督府「朝鮮の年中行事」一九三二年、依田千百子「朝鮮の稲作儀礼——その類型を中心として——」(『民俗学研究』三―②)一九六六年、金爾基「朝鮮の芸能」(岩崎美術社)一九六七年、任東権「朝鮮の民俗」(岩崎美術社)一九六九年、「朝鮮を知る事典」(平凡社)一九八六などを参照した。

- (16) この記述の直前に、著者は東京板橋の下赤塚の「田遊び」の紹介をしており、比較的論じられたものである。また、孫晉泰氏の「新穀祝劇」という著作は入手できなかったため、そのまま引用しておいた。
- (17) 任東権「韓国民俗学の現状」(『朝鮮の民俗』一九六九年)。
- (18) 「韓国の民俗大系 韓国民俗総合調査報告書」一九八八年。
- (19) 朴圭弘「韓国の村祭り」(国書刊行会)一九八二年。

付記……本稿は一九九一年度文部省科学研究費補助金(B)を得て調査を行った成果をまとめたものである。